

第2 生息地

【生息確認場所】 砺波市鷹栖 (Takanosu) と小矢部市水島との境界付近。出町外六ヶ村用水のコンクリートの側壁面。庄川扇状地の扇端からのおよそ 10km の距離。

【確認日】 2002 年 7 月 7 日

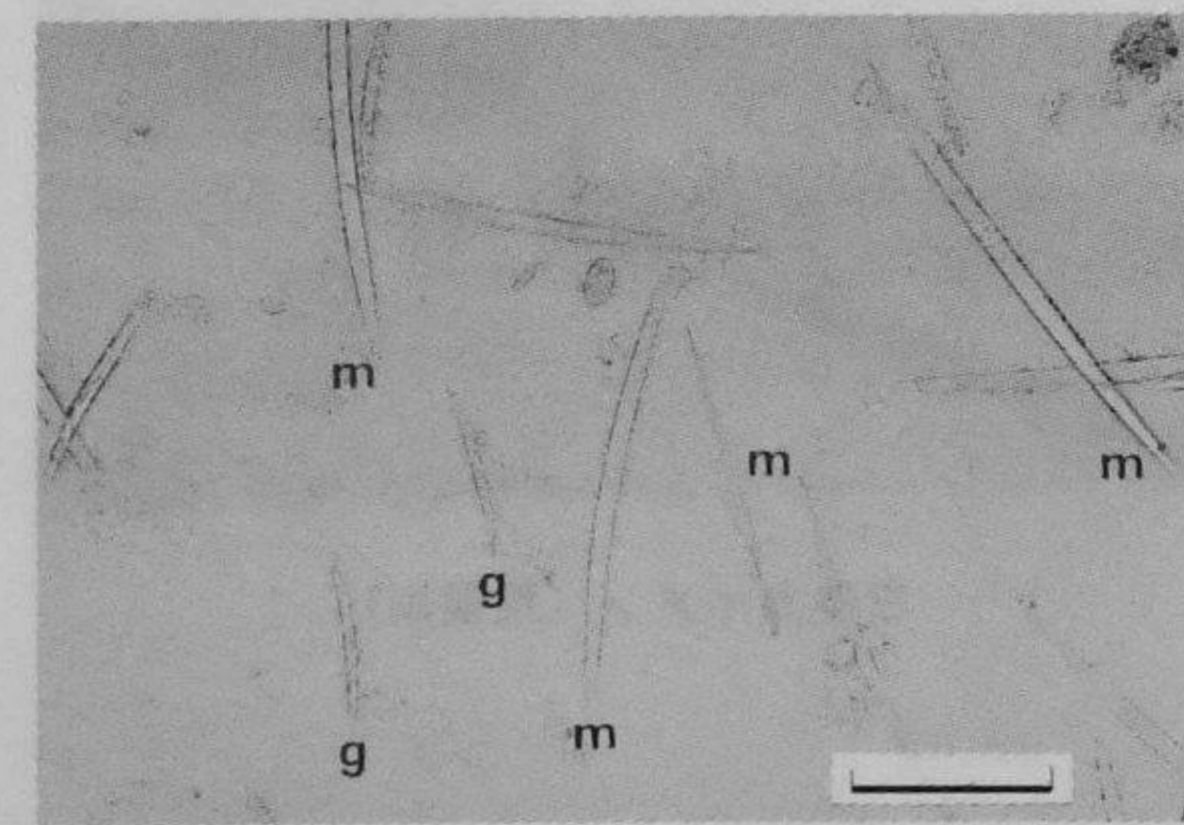
【採取者】 布村昇



出町六ヶ村用水での生息場所風景



鷹栖での生息状況



ヨワカイメンの骨片顕微鏡写真、骨格骨片 (m) と芽球骨片 (g)  
出町外六ヶ村用水産。スケールは 100 μ m.

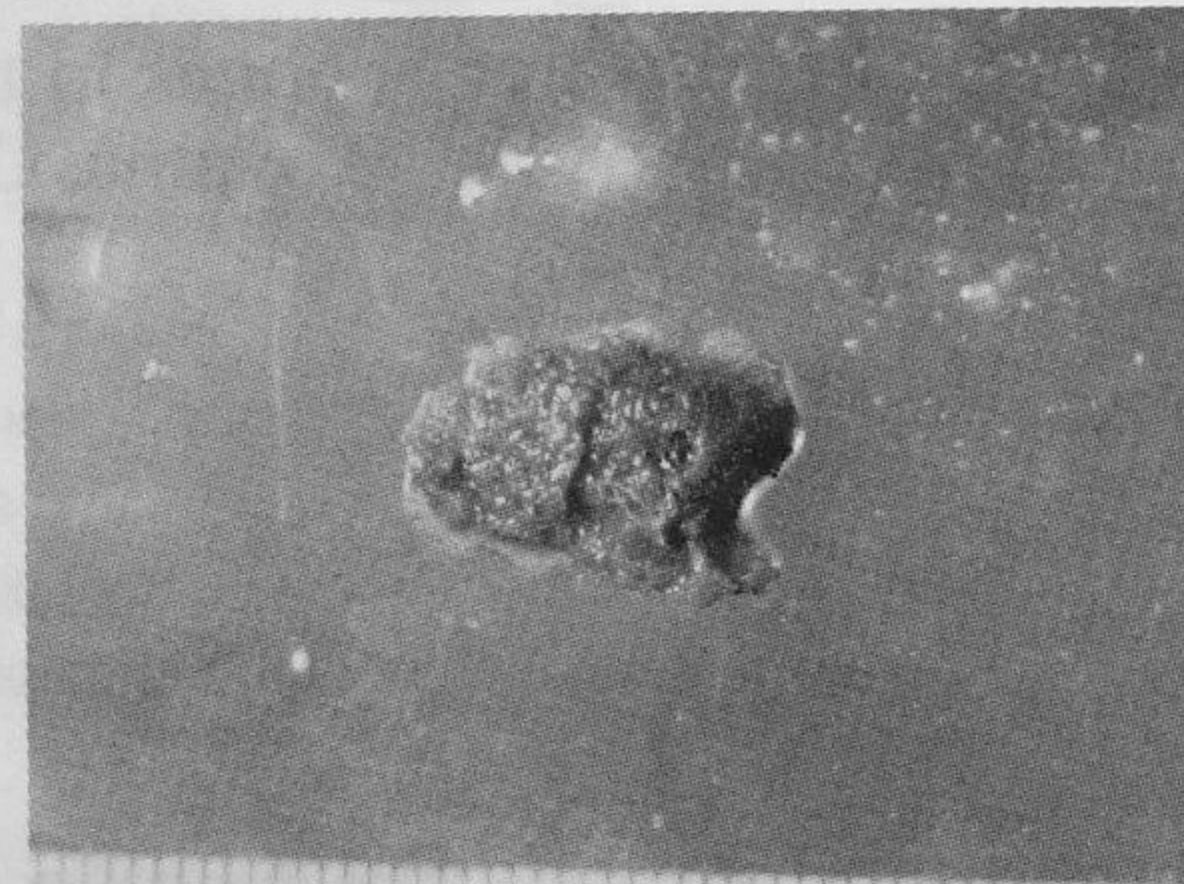
タンスイカイメン科 Spongillidae の 1 種

【特徴】 骨格骨片は平滑

【生息確認場所】 富山県砺波市狐島の上黒石川 (Kami-kuroishigawa)。庄川扇状地の扇端からのおよそ 12km の距離。

【確認日】 2002 年 6 月 3 日

【採取者】 布村昇



タンスイカイメン科の 1 種 (上黒石川)

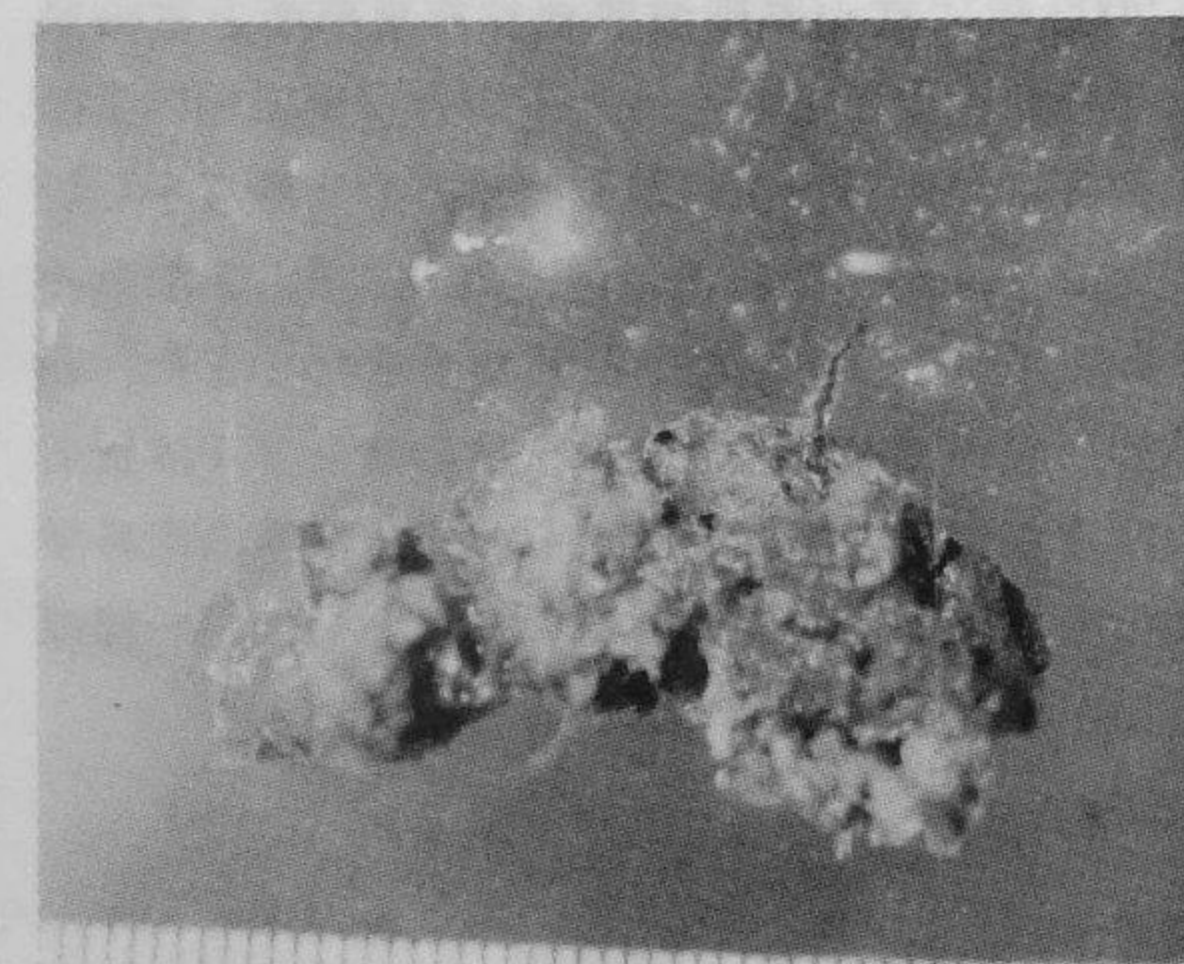
タンスイカイメン科 Spongillidae の 1 種

【特徴】 骨格骨片が平滑。異常形態骨片が多い。

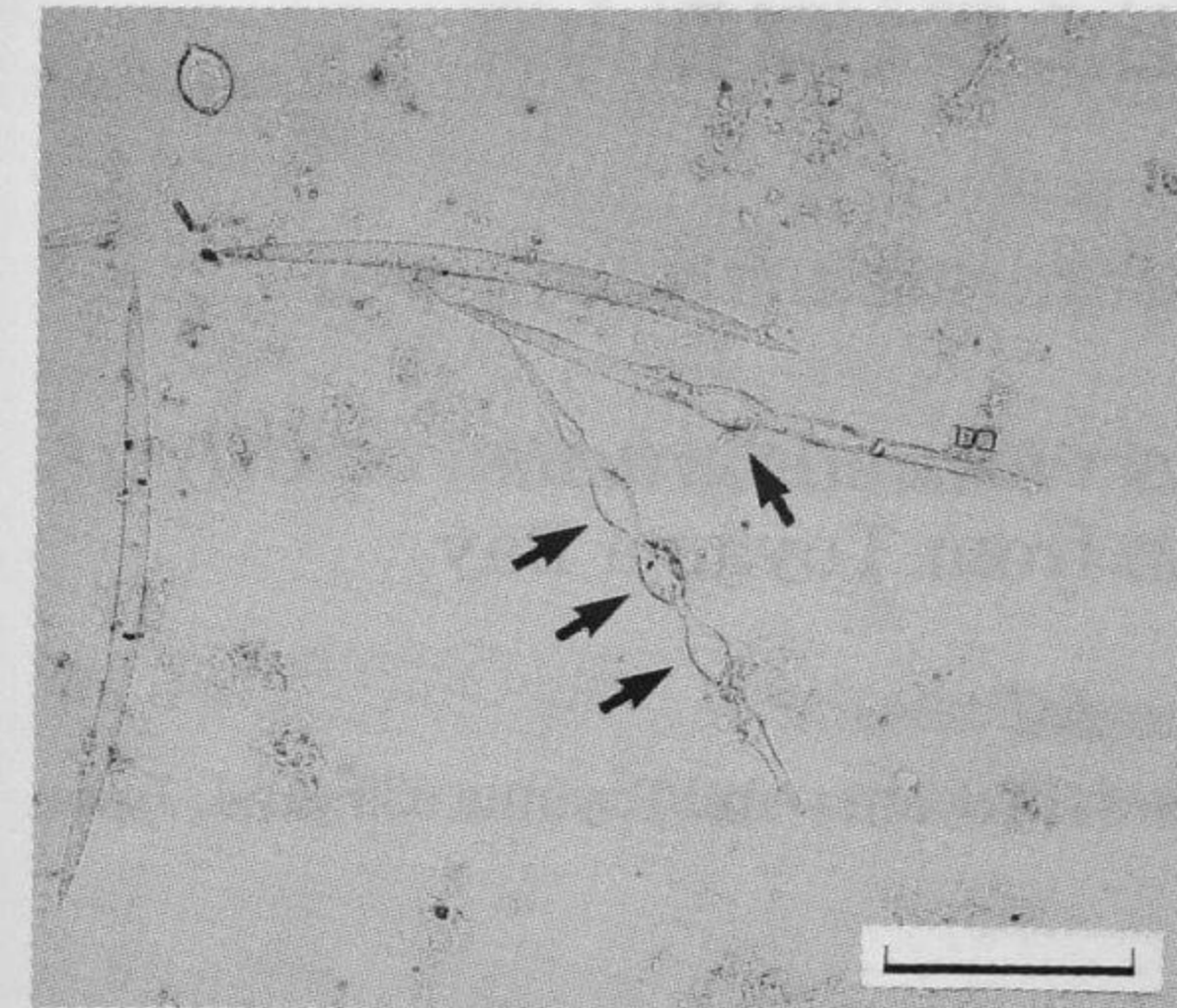
【生息確認場所】 富山県小矢部市水島と砺波市鷹栖境界の狐島 (Kitsunejima) 用水のコンクリート側壁面。庄川扇状地の扇端からのおよそ 10km の距離。

【確認日】 2002 年 6 月 16 日

【採取者】 布村昇



タンスイカイメン科の 1 種 (狐島用水)



膨れ出し (矢印) を持つ骨格骨片、狐島用水産。  
スケールは 100 μ m.

【コメント】 骨格骨片しかなかったものの形態の異常な骨格骨片をもち興味深い。この海綿が芽球を形成した場合、異常な芽球骨片を作るのではないかと想像される。調査は春から夏にかけて行われ、今後、夏から秋にかけて芽球は形成期での調査が必要である。

## ムラサキダコがまとまって漂着

布村 昇

富山市科学文化センター 〒939-8084 富山県富山市西中町 1-8-31

Occurrence of *Tremoctopus violaceus gracilis* (Eydoux & Souleyet, 1852) from Toyama Bay

Noboru Nunomura

Toyama Science Museum, Nishinakano-machi 1-8-31, Toyama-shi, Toyama 939-8084, JAPAN

平成14年(2002年)10月13日、富山貝類同好会の打ち上げ貝類の調査会で富山市四方の海岸で見慣れないタコが波打ち際から3-10m先の海中を漂っているのが見えた。この海岸で3個体確認したが、全て弱っており、波が高かったので捕獲を諦めた。

同会員は新湊市本江の足洗海岸に移動しましたが、ここでも同様な状況を見つけた。少なくとも5個体あり、うち、1個体を採取することができた。手にすることができたので、観察したところ、ムラサキダコ *Tremoctopus violaceus gracilis* (Eydoux & Souleyet)、であることが判明した。本種はムラサキダコ科に属するものであり、大きさは50-60cmになり、おもに熱帯の海に生息しているが、雄は3cm程度であり、大型のものはすべて雌である。珍奇な種とされている。

なお、同日、会員の湊克明、湊洋平父子も採集され富山市科学文化センターに届けられた。いずれも弱っており、ほとんど自力で遊泳することができなかつたようである。また、足の筋肉がかなり傷んでいた。

湊氏は同日富山市岩瀬浜でも出かけたが、ここでは確認されなかったという。いずれの個体もは弱って採捕されたタコの色は、死後時間が経つにつれて白っぽい色から紫色に変化していくが、既に紫色であった。

2002年は他の県でも多数の出現を見たようで九州はもとより、秋田県や北海道でも目撃例や捕獲例が多かつたようである。



新湊市本江に打ちあがったムラサキダコ

## 富山湾で捕獲されたマナマコの白化個体

高山 茂樹<sup>1)</sup>・大田 希生<sup>2)</sup>

1) 魚津水族博物館, 2) 北陸水中映像

## An Albino Individual Japanese Trepang (Sea-cucumber) Collected in Toyama Bay.

Shigeki Takayama: Uozu Aquarium

Mareo Ohta: Hokuriku Underwater Pictures

## はじめに

海産生物の白化個体は、オキナエビスガイを始めとする貝類や魚類で知られており、発見されると話題になる。

著者の一人・大田が、富山県魚津市青島沖の海底で、マナマコ *Apostichopus japonicus* の白化個体を採集した。

富山湾におけるマナマコの白化個体の初めての捕獲記録と考えられるので、報告する。併せて、近年のマナマコの白化個体の捕獲例と比較する。

本報告をまとめるにあたり、東海大学海洋科学博物館 毎原泰彦氏、神戸市立須磨海浜水族園 武田曜男氏、福井海浜自然センターのみなさんには、貴重な飼育情報を提供していただいた。厚くお礼を申し上げる。

## 1. 魚津産マナマコ白化個体 (図1)

採集日: 2002年1月26日

採集場所: 富山県魚津市青島沖 水深4m

海藻の茂る転石地帯

採集者: 大田 希生

体長: 18cm (体が伸びている時に計測)

特徴: 体色は、ほとんど白。しかしながら、背面前部がやや茶色がかかりくすんだ白色に見える。

(図1-1、2) また、背側全体に茶色の小点が疎らにある。(図1-2) 腹側にもわずかに茶色の小点がある。管足は白色。(図1-3) 周口触手の先端部がわずかに赤い。

マナマコは、日本から奄美大島付近の沿岸に生息する普通種で、濃淡のある栗色と褐色の斑紋の個体から暗緑色個体まで体色に個体差がある。富山県沿岸では年に数トン漁獲されるのみで、潜水により採集されるか刺網に混獲されるものが水揚げされる程度である(林, 1991)。

通常、白化個体は遺伝的に色素が欠乏したもので、自然界では外敵に見つかりやすいことから、生き残ることは少ない。マナマコの幼体は転石の下や隙間に潜り込んで入ることが多い。今回発見された青島は、海藻の生い茂る転石地帯で、白化個体のマナマコの絶好の隠れ家になったと考えられる。

なお本個体は、2002年12月現在、魚津水族館の展示水槽で飼育している。

## 2. 近年のマナマコ白化個体の捕獲例

マナマコの白化個体は、珍しく目立ちやすいことから、発見されると各地の水族館に持ち込まれることが多い。しかしながら、報告文になることは少なく、その実情はわからない。そこで、水族館広報誌やホームページからマナマコの白化個体の捕獲例を集めた(表1)。2001年に3例の発見記録があるが、共通点は認められない。また、マナマコを多量に捕獲するマナマコ潜水漁の漁師やマナマコ漁のある漁協から水族館に持ちこまれる例が認められる。